

7. アセスメント・レポート

アセスメント・レポートを作成して学校に送ります。

文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」
DLA にもとづくアセスメント・レポート

学 校 名		名前		学年		年齢	
来日時期		来日時年齢		日本語の学習環境に 入ってからの期間		つながりの ある国	家庭言語
実施年月日		アセスメント 担 当 者 名					

<「ことばの力のものさし」に照らした〇〇さんのことばの力>

		思考・判断・表現を支える包 括的なことばの力	日本語固有の力
目 標	聞く力		
	話す力		
	読む力		
	書く力		
現 状	聞く力		
	話す力		
	読む力		
	書く力		

		ステージ 【イマココ】期	ステージB 【イマココから 順序】期	ステージC 【順序】期	ステージD 【結果】期	ステージE 【抽象】期	ステージF 【評価・発展】 期
ステップ	書く						
	読む						
8	聞く・話す						
	書く						
7	読む						
	聞く・話す						
6	書く						
	読む						
5	聞く・話す						
	書く						
4	読む						
	聞く・話す						
3	書く						
	読む						
2	聞く・話す						
	書く						
1	読む						
	聞く・話す						

<〇〇さんのことばの力についてのコメント>

	思考・判断・表現を支える包 括的なことばの力	日本語固有の力
話す力 聴く力		
読む力		

<ことばの力を伸ばすために>

学校の 先生方 及び 支援員 の方へ	
保護者 の方へ	

アセスメント・レポート様式

アセスメント・レポートは、Excel 形式で作成することをお勧めします。作成したファイルをデータで学校に送りますが、さらに学校から保護者にアセスメント・レポートを送ってもらうにあたって、「ことばの力を伸ばすために」の欄を非表示にして印刷してもらうことで、簡単に保護者への結果報告が可能となります。

なお、本研究の成果を公表する文部科学省及び弘前大学文部科学省委託事業のホームページには、マニュアルと併せて、Excel 形式のアセスメント・レポートの様式をダウンロードできるようにしてありますので、活用してください。

URL https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
<https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/mext-outsourcing.html>

（１）子どもの基礎情報の記入について

子どもの年齢や来日時期といった基礎情報は、子どもの特性や能力を正しく理解し、その後の指導方針を決定していく上で重要な情報となります。アセスメント・チェックシートや事前ヒアリングで得た情報をもとに、正確に記入しましょう。

（２）『ことばの力のものさし』に照らした〇〇さんのことばの力』について

各技能領域について、「ことばの力のものさし」を参考にしながらアセスメントの結果を記入しましょう。「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力」部分は、日本語も母語も含めた、子どもが持っているすべてのことばのレパートリーを使って最大限にできることを評価します。次のページの表は、「ことばの力のものさし」に記載されている「包括的なことばの発達ステージ」の各年齢段階の特徴をまとめたものです。これをみてもわかるように、「ことばの力のものさし」の「包括的なことばの発達ステージ」の表には、各ステージにおける発達の特徴と各ステージの年齢の目安（年齢枠）がまとめられています。

子どもがどのステージにいるかを判断する際には、まず年齢枠の範囲を確認し、対象の子どもがどの発達ステージの範囲にあてはまるかを確認します。その後、アセスメントからわかった子どもの状態と各発達ステージの状態を照らし合わせ、子どもにあてはまるステージを判断しましょう。もちろん、「ことばの力のものさし」に載っている年齢枠はあくまで目安であり、子どものことばの発達には個人差がありますので、子どもの年齢から想定されるステージの範囲に子どもが当てはまらないことがあります。年齢枠にとらわれ過ぎず、アセスメントから得られた子どもの状態に最も一致するステージを選択するようにしましょう。

「包括的なことばの発達ステージ」の各段階の特徴

	年齢枠の範囲	各ステージの特徴
ステージF 【評価・発展】期	中3～高校段階	中学～高校の教科学習内容、抽象的概念、実社会の話題 多角的・批判的視点からの議論・意見・分析・評価・推敲
ステージE 【抽象】期	小5～中2段階	高学年～中学の教科学習内容、抽象的概念 主題・要点の解釈、一貫性のある説明、ジャンル別作文
ステージD 【因果】期	小3～小4段階	中学年の教科学習内容、基本的概念 因果関係の理解・説明、テーマ作文
ステージC 【順序】期	小1～小2段階	身近なこと・経験したこと、低学年の内容 順序に沿った理解・表現、出来事作文
ステージB 【イマココから順序】期		身近なこと・経験したこと、幼児・低学年前半の内容 対話による支援を得て、おおまかに理解・表現
ステージA 【イマココ】期		身近なこと・経験したこと、幼児・低学年前半の内容 対話による支援を得て、断片的に理解・表現

一方で、「日本語固有の力」部分は、日本語の知識や技能の習得状況を、ステップ1～8の8段階で評価します。下の表は、「ことばの力のものさし」に記載されている、「日本語の習得ステップ」の各年齢段階の特徴をまとめたものです。「日本語の習得ステップ」でも、各ステップにおける発達の特徴と各ステップにあてはまる年齢段階の目安がまとめてあります。

「日本語の習得ステップ」の各段階の特徴

	小1～小2段階	小3～小4段階	小5～中2段階	中3～高校段階
ステップ8				中学校から高校レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章
ステップ7			高学年から中学レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章	
ステップ6		中学レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章		
ステップ5	日常的な語彙・表現（幅広い）、低学年レベルの談話・文章（自由な単文・重文・複文の生成）			
ステップ4	日常的な語彙・表現（制限あり）、単文から基礎的な重文・複文			
ステップ3	身近な語彙・表現、単文			
ステップ1～2	ごく限られた語、文字の習得の開始			

子どもがどのステップにいるかを判断する際には、まず子どもの年齢段階にあてはまるステップの範囲を確認します。その後、アセスメントからわかった子どもの状態と各ステップの状態を照らし合わせ、子どもにあてはまるステップを判断しましょう。子どものステップが明らかになったら、「ことばの力のものさし」に載っている各ステップの特徴を参考にしながら、アセスメント・レポートを記入しましょう。

『「ことばの力のものさし」に照らした〇〇さんのことばの力』の右側の図では、「包括的なことばの発達ステージ」を横軸、「日本語の習得ステップ」を縦軸として、対象の子どもの現在のことばの力を記入します。「包括的なことばの発達ステージ」には、日本語と母語の技能の中で一番高いステージを記入してください。「日本語の習得ステップ」では、技能ごとに現在の力を記入して

ステージとステップのマトリックス図の記入例（滞日7年の小学3年生の例）

ステージ		ステージ A 【イマココ】期	ステージ B 【イマココから順序】期	ステージ C 【順序】期	ステージ D 【因果】期	ステージ E 【抽象】期	ステージ F 【評価・発展】期
8	書く						
	読む						
	聞く・話す						
7	書く						
	読む						
	聞く・話す						
6	書く						
	読む						
	聞く・話す						
5	書く						
	読む						
	聞く・話す						
4	書く						
	読む						
	聞く・話す						
3	書く						
	読む						
	聞く・話す						
2	書く						
	読む						
	聞く・話す						
1	書く						
	読む						
	聞く・話す						

ください。マトリックス図の中には、〈書く〉についての項目がありますが、オンライン・アセスメントでは〈書く〉についてのアセスメントは実施しませんので、記入時点で〈書く〉については空欄のままで問題ありません。

次に、当該の子どもの年齢枠の目安を記入します。現在の力と年齢枠の目安との関係及び来日時期・滞日年数などの基本情報を参考にしながら、「ことばの力を伸ばすために」の部分で具体的な助言をしていくようにしましょう。

なお、マトリックス図では、最終的には指導の目標も入れ、具体的な学習・指導計画を検討することになりますが、それは、事後のフォローアップ会議で、学校の教員と協議しながら進めるとよいでしょう。

（3）「〇〇さんのことばの力についてのコメント」について

この部分では、アセスメントで明らかとなった子どものステージやステップに基づいて、技能領域ごとに子どもの状態について記入していきます。アセスメントの録画を見て、どのステージやステップにあてはまるかを判断していきます。その際、事前ヒアリングで聞きとった日常の様子も判断材料になるでしょう。「ことばの力のものさし」には、各ステージ・ステップの特徴がまとめてありますので、参考にしながら記入していきます。「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力」は左側の欄に、「日本語固有の力」は右側の欄に記入します。

しかし、実際には、「ことばの力のものさし」に記載されているステージやステップのレベルを表す文章と、アセスメントの中で見取った子どもの特徴が常にぴったり合うというわけではありません。オンライン・アセスメントは、対面で実施するアセスメントよりも時間が限られ、画面上見取れない内容もあります。「ことばの力のものさし」の記述文をそのまま写すのではなく、アセスメントでわかった子どもの状態に合わせて記入するようにしましょう。見取れなかった部分については無理に書こうとせず、アセスメントで見取れた部分について正確に記入していくことを意識するとよいでしょう。その際、アセスメント時の子どもの様子から、〈聞く・話す〉では、積極的にコミュニケーションを取ろうとしているかといった意欲などについても評価するとよいでしょう。

また、〈読む〉についても、本の世界を楽しもうとしているかなど、読むことについての姿勢などについても記載することができるでしょう。

オンライン・アセスメントで見取ることができない内容は、事後のフォローアップ会議で学校の先生方と話しながら検討することができます。その意味で、アセスメント・レポートは絶対的なものではなく、フォローアップ会議のための資料として位置づけるのが適切だといえます。

（４）「ことばの力を伸ばすために」について

１）「ことばの力を伸ばすために」において意識する点

以下の５つの側面を基本として助言を記入してください。子どもの状態や今後の支援の在り方についてより具体的に記入しましょう。

- A) 複数言語で成長することへの配慮（母語・継承語の尊重、母語・日本語両方の伸長等）
- B) 学習形態・環境への配慮（取り出しや放課後補習の必要性、学級での学習の際の配慮等）
- C) 日本語の学習内容・教材・指導方法（具体的な学習内容・教材名・指導方法や指導上の工夫等）
- D) 教科学習について（日本語の力、母語の力、年齢との関係からの判断、取り出す教科、補習等）
- E) 日本語指導担当と、担任や教科担当の連携について

学習指導に関する助言については、『実践ガイド』の実践編「第５章 実践記録集」(p.44～183) 及び資料編「第６章 作文指導の中での書く力の評価」(p.186～199) を参考にすることで、より具体的な助言が可能になるでしょう。

また、子どもに対する指導や支援について、学校側や保護者が以下のような誤った知識を持っている可能性を感じた場合には、その考えが修正されるような内容を入れるとよいでしょう。

- 子どもはことばを覚えるのが早いので、放っておいても自然に言語を覚えられよう。
- 家庭で母語を使っているので、子どもの日本語が伸びない。家庭でも日本語を話すように指導した方がよいだろう。
- 流ちょうに日本語を話せる / 日常会話において日本語の問題はないので支援は必要ない。勉強ができないのは、本人のやる気がないせいだろう。
- 翻訳アプリがあるので、それ以外の支援は特に必要ないだろう。
- 日本語の指導や支援は、日本語教師の資格のある支援員に任せておけばいいだろう。
- 日本語ができないので、授業への参加はできないだろう。授業への参加は日本語ができるようになってからがよいだろう。

オンライン、ここがポイント！！

オンライン・アセスメントでは、レポートが学校や保護者への最初のフィードバックになります。子どものことばの力の評価については簡潔かつ的確に、〈ことばの力を伸ばすために〉での助言は、学校や保護者に寄り添って記載するようにしましょう。アセスメント・レポートの内容が、その後の学校との連携の基礎になります。

2) 「ことばの力を伸ばすために」部分の記入例

「学校の先生方及び支援員の方へ」部分と「保護者の方へ」部分の具体的な例文をいくつか紹介します。アセスメント・レポートを作成する上での参考としてください。

「学校の先生方、支援員の方へ」部分の記入例	A) 複数言語で成長することへの配慮 • さまざまな先生方からの声かけは、子どもの自己肯定感を高めますので、母語や母文化を尊重する姿勢を大切にしつつ、多くの先生方に温かく接していただければと思います。 • 母語の力を発揮したり、母国についての知識を活用できる場を作るなどして、複言語、複文化を持つことに自信を持たせたり、他の児童生徒が異文化を学ぶ機会とするとよいでしょう。 • 保護者との連携を密にとり、本人及び保護者の言語・文化が学校でも尊重されているということをさまざまな機会を通じて伝えられるとよいと思います。そうした取り組みの中で、本人がバイリンガルとしての自分のアイデンティティを強固なものとし、両方の言語資源を積極的に活用できるように支えていきましょう。 • 当該児童・生徒の存在によって、周りの子どもたちが多様性と多文化共生を実感できるような環境づくりをするとよいでしょう。 • 自己肯定感を育むために、母語や母文化を尊重する姿勢を大切にいただければと思います。 B) 学習形態・環境への配慮 • 取り出し指導の中で、母語の力も借りながらクラスで学ぶ内容を理解し、その内容について、日本語で説明したり自分の考えを表現したりできるようにしてから、教室でクラスメイトとともに学ぶようにするなどの取り組みをするとよいでしょう。 • 日本語指導では、教科と関連した語彙や表現を習得することに重きを置いた指導が必要であり、取り出し指導で学んだ教科学習の語彙や表現を使って話す機会を在籍学級の学習の場で設定するなどの配慮が求められます。 • 取り出しの日本語指導の必要はなさそうですが、教室での学習においては、担任の先生の支援は必要でしょう。 • 楽しく対話に参加できるように、朝の会での短いスピーチなど、日本語使用の機会を増やしたり、日本語の摂取量が多くなるように座席の指定や仲間づくりに配慮したりするとよいでしょう。 • 学年が進む中で、学習言語の習得に若干の遅れが出ることもあるかもしれません。それを防ぐためには、日頃から多くの本に触れる環境をつくるとともに、指導者が子ども本人のつまずきに気づくことが大切でしょう。
------------------------------	--

C) 日本語の学習内容・教材・指導法

- わからないことを質問できなかったり、わからないことばを無意識に聞き流してしまったりすることがありそうです。子どもの様子や反応を見て、タイミングよく声かけをしてあげてください。
- 日本語の語彙数が少ないことで、自分の思いをうまく伝えることができない場面もあると思います。何がしたいのか、何が言いたいのか、しっかりと耳を傾けてあげてください。
- 読書などでインプットを増やすことと同時に、それをもとに話したり書いたりしてアウトプットさせることも大切です。アウトプットした日本語の表現の正しさ、因果関係など文脈の正しさを高める支援をしていくことが、今後、学習を進める上で重要でしょう。
- 学級では、日本語でスピーチしたり人前で発表したりする場を設定するなど、自信を育むことが、一層、日本語の習得を促進すると考えられます。
- 新しく耳にする語彙や語句については、その意味を想像させたり、活用の仕方を具体的に教えたりし、丁寧に指導することが求められます。また、単語レベルでの発話を文レベルで促すなど、まとまりのある話ができるよう寄り添いながらスモールステップで指導します。

D) 教科学習について

- 学級での学習に参加する際には、担任や教科担当がやさしい日本語でゆっくり指示や説明を行ったり、視覚的な教材を示したりするなどの配慮が求められます。
- 取り出し指導の中で、母語の力も借りながら在籍学級で学ぶ内容を理解し、その内容について、日本語で説明したり自分の考えを表現したりできるようにしてから、教室でクラスメイトとともに学ぶようにするなどの取り組みをするとよいでしょう。
- 学年が上がるにつれて、教科特有の語彙や表現の理解が難しくなることが考えられますので、聴いてわかるだけでなく使える語彙にするために、話の内容を再話させたりするなど指導の工夫が求められます。
- 教科学習では、各教科の中心的な概念についてやさしい日本語で学べるように、支援員や教科担当がサポートしましょう。ポイントになる概念やキーワードを、翻訳機を使って母語で示したりするとよいでしょう。
- 本人が、助けを求めることを恥ずかしがって隠しているうちに、課題が大きくなってしまわないよう、丁寧に読みや書きの支援をすることが必要です。

	E) 日本語指導担当と、担任や教科担当の連携について • 担任・教科担当・支援員等の間で、本人の日本語のレベルについての情報を共有し、連携してサポートできるようにしましょう。 • 学年が上がるにつれて周囲との差が出てくる可能性もありますので、日本語指導者と担任・教科担当の日常的な連携を大切にしましょう。 • 取り出し指導で学んだことを、在籍学級での学習や周囲とのコミュニケーションの中で使うことができるよう、日本語指導者と担任・教科担当の日常的な連携を大切にしましょう。 • 取り出し指導の中で在籍学級での授業に参加するための先行学習（例えば単元のキーワードの予習や発表の準備など）をするなど、在籍学級と取り出し教室との連携が非常に大切です。 • 楽しく対話に参加できるように、朝の会での短いスピーチなど、日本語使用の機会を増やしたり、日本語の摂取量が多くなるように座席の指定や仲間づくりに配慮したりするとよいでしょう。
「保護者の方へ」部分の記入例	A) 複数言語で成長することへの配慮 • 家庭では相手に応じて母語または日本語を使い分けており、二つの言語が家族間でのコミュニケーション、教科学習を支えるためのツールとなっています。引き続き、二つの言語を大切にする姿勢で、成長を見守っていきましょう。 • 母語で複雑な現象を理解したり考えたり表現したりする力は、日本語で教科を学ぶ際に活かされていきます。ぜひ、母語でも、さまざまな本を読んだり、家族でニュースを見て語り合ったりする経験を積み上げていきましょう。 • 二言語が話せる家庭環境は、とても素晴らしいと思います。アイデンティティ形成のためにも今後も母語を保持する働きかけは続けてください。 B) 学習形態・環境への配慮 • 母語でのリテラシーは、教科の学習にも活かしていくことができます。今後もぜひさまざまなジャンルの本に触れられる環境を維持していただければと思います。 • 家庭での学習習慣をつけることが大切です。「今日何をした?」「宿題は?」など毎日声かけをしてあげてください。 • 日本語の語彙の力を高めるために、母語で知っている語彙の日本語を確認したり、日本語の本での読み聞かせを継続したりするなどして、無理のない範囲で、日本語で理解したり表現したりする機会を確保することが望ましいです。

C) 日本語の学習内容・教材・指導法

- 読書習慣がつくように支援することが必要でしょう。図書館を利用して、年齢が低い子どもには絵本を読ませるなど、年齢に合った本人が楽しめる本が選べる環境をつくりましょう。少し年齢が高い子どもにはさまざまな日本語レベルの本が選べる「にほんごたどく」(<https://tadoku.org/japanese/>) などを利用すると、無理なく読めるレベルのものを探することができます。
- 日本語の生活言語能力はしっかりと身につけていますから、日常生活で困ることはないでしょう。これからは、教科学習を支えることばの力を伸ばしていきましょう。
- 母語の語彙を増やし、自分が伝えたいことを伝えられるように家庭でのインプットの質を高めるようなかわり方を今後も継続することができればよいと思います。

